HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域酪農の現段階と酪農民の学習運動
Author(s)	丸山, 美貴子
Citation	社会教育研究, 22, 19-35
Issue Date	2004-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28554
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P19-35.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域酪農の現段階と酪農民の学習運動

丸　山　美貴子

1．は　じ　め　に

今日の農村社会にとって，持続的な地域経済発展は最重要課題である。北海道の広範な農村地帯において，地域経済発展の要は地域農業の発展にある。90年代以降の農業政策では，農業生産の担い手として国際競争力を持つ大規模農家経営，農業生産法人が想定されており，従来の農民家族経営を否定する方向が示されている。この政策動向は，地域農業の再編，ひいては農村地域社会の再編を引き起こしかねず，農村社会教育においても，学習主体とその学習課題のあり方への検討を迫っているように思われる。

このよう政策に対し，実践的批判を通し農民的酪農の発展方向を指し示してきた北海道東部・別海町における酪農民の学習実践が注目される。北海道の中でも耕境に位置する別海町は，酪農「近代化」政策がストレートに貫徹してきた地域である。地域経済構造のみならず，自治体財政構造，政治構造，さらには地域住民の日常意識も国策に大きく規定されきた。酪農「近代化」政策に対し政策に振り回されず主体的な農民的酪農を築き上げる試みを，酪農民は粘り強い学習運動とともに追求してきた(1)。今日では「マイペース酪農」と称される農民的酪農の実践は，行政においても営農類型の一つとして評価されるに至っている(2)。

このように「マイペース酪農」の実践は，常に酪農民を主体とする学習運動に支えられてきたことが特徴的である。その学習過程には，主体的営農を目指しながらも，酪農政策に巻き込まれていた自己の労働のあり方と意識を問い直す契機がある。そして，個々の農民的酪農を集団的に検証しながら，自己の生き方，農業観を鍛え上げていく過程がある。この実践は，酪農民の学習運動としてのみならず，地域住民の日常意識を規定する生産・労働のあり方と，それによる人間形成過程の問い直しを課題とする社会教育に対しても，重要な示唆を与えていると思われる。

そこで本稿では，1980年代後半以降に焦点をあて，農業政策の地域的具体化に規定された日常意識を酪農民が批判的に問い直し，営農実践を通じて克服していく過程とそれを支えた学習運動について考察を行いたい。まず，90年代の酪農政策の展開と地域的な酪農経営の動向について概括する。第二に，農民の学習運動の中で地域酪農の課題がいかに意識され，学習実践に反映し，酪農民の意識変化を促してきたのかについて考察する。

2．90年代の酪農政策と酪農経営動向

(1) 90年代酪農政策の動向

90年代の政策基調は，農産物貿易自由化である。酪農業においても，91年には牛肉の輸入自由化が始まり，WTO体制のもと95年には牛乳・乳製品の自由化が行われ，酪農業も国際間の競争へ包摂されることになった。この状況下で打ち出された酪農政策は，総じて国家介入を減らし競争・市場原理を農業環境と市場政策に導入することで，酪農業の生き残りをはかろうとするものであった[(3)]。

その特徴は，第一に，食料自給率の向上のため，牛乳・乳製品の生産増大を強力に推進することである。第二に，国際競争力をもった効率的・安定的生産体制の確立のため，個別農家経営の合理化，生産コスト削減をはかることである。従来の農民家族経営にかわる，企業経営的大規模農家と農業生産法人の育成が強力にすすめられている。さらに，流通コスト削減のため，農協の広域大型合併も推進された。第三に，価格政策への市場原理の導入である[(4)]。

これらをあますところなく具体化しているのが，別海町の酪農政策である。90年代後半以降，農業関連諸機関を通じた各農家への増産圧力は強まり，また，増産体制を確立するための大規模化と，新たな施設・機械装備の投資（フリーストール，ミルキングパーラー導入）が推進された。さらに，農業生産法人も相次いで設立されている。これら大規模経営を支える地域的支援システムとして，雇用労働力の確保のための人材派遣システム，酪農家を搾乳労働に専念させるための分業システムの構築もはかられてきた。

(2)別海町における酪農家の経営動向

①別海町全体

このような政策のもとでの，別海町における酪農経営の推移について概括する。

表1　別海町における酪農経営の推移

年度	農家数	飼養戸数	牧草専用地（ha）	乳用牛	乳量（t）	一戸あたり頭数	一頭あたり牧草地（ha）	一頭あたり乳量（kg）
1965	2,132	1,835	15,462	19,541	44,385	11	0.79	2,271
1970	1,831	1,696	33,233	40,184	99,951	24	0.83	2,487
1975	1,582	1,463	49,185	62,459	139,691	43	0.79	2,237
1980	1,464	1,338	53,896	82,764	232,097	62	0.65	2,804
1985	1,325	1,270	59,092	93,450	290,970	74	0.63	3,114
1990	1,250	1,181	61,433	100,173	340,104	85	0.61	3,395
1995	1,129	1,079	61,811	104,708	398,060	97	0.59	3,802
2000	1,045	997	61,206	112,100	439,000	111	0.55	3,916

資料：農業基本調査，農林水産統計

表2　24ヶ月以上の乳用牛の飼養規模別戸数の割合

		30頭未満	30～49頭	50～99頭	100～149頭	150頭以上
別海町	1995年	4.0	20.5	67.0	7.7	0.8
	2000年	3.2	15.7	66.4	11.7	3.0
全　道	1995年	21.0	33.9	41.6	3.1	0.4
	2000年	15.5	28.8	48.0	6.0	1.7

資料：1995年農業センサス，2000年世界農業センサス

（表1）全体的に，酪農家の離農の歯止めがきかないまま，飼養頭数，乳量生産ともに増大傾向にある。とくに1995年から2000年にかけての，一戸あたり飼養頭数の増加が著しい。反比例して，一頭あたり牧草地面積は減少し，0.55 haまで落ち込んでいる。

（表2）飼養頭数規模でみても，50～99頭飼養農家の割合が最も高いことに変わりはないが，1995年から2000年にかけて，100頭以上飼養農家割合が急増し15%にも達している。全道平均と比較しても，別海町において大規模農家層がいかに多いかがわかる。

②A農協組合員農家の階層動向[5]

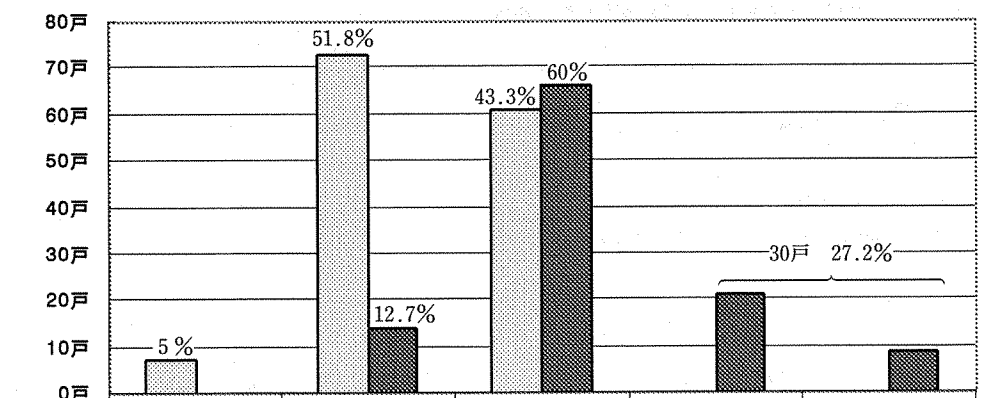
さらに，階層ごとの農家動向を考察するため，A農協組合員農家を対象に考察する。

A農協のある地域は，昭和前期から入植が始まっ地域であるが，これまで堅実な農家経営が多く農協経営も健全であると評価されてきた。その状況が一変したのが90年代である。

表3　A農協組合員農家の酪農経営状況

	1988年	2002年	増減率（02/88年）
牛乳出荷戸数（戸）	141	110	78.0%
草地面積（ha）	5,352	5,246	98.0%
乳牛飼養頭数（頭）	10,046	14,096	140.3%
うち経産牛頭数	6,758	9,560	141.5%
一戸あたり経産牛頭数	48	87	181.3%
一頭あたり牧草地（ha）	0.79	0.55	69.3%
出荷乳量（t）	37,289	63,608	170.6%
一頭あたり乳量（kg）	5,518	6,654	120.6%
一戸あたり出荷乳量（t）	264	578	218.7%

（表3）農家戸数が2割減少し，草地面積も増えていないにも関わらず，飼養頭数は4割も増大している。これを上回って増えているのが生産乳量である（7割増）。一戸あたり平均生産乳量は578.3 tと倍増し，別海町内の4農協の中で最高位となった。この生産規模を実現するため，多頭飼育可能な施設・機械装備（フリーストール）が3割の農家で導入され，11戸の生産法人が設立されている。



	0～29頭	30～49頭	50～99頭	100～149頭	150頭～
1988年	7戸	73戸	61戸	0戸	0戸
2002年	0戸	14戸	66戸	21戸	9戸

図1　A農協における経算牛頭数別農家数の推移

（図1）階層別に農家戸数とその割合をみると，1988年に最も多かった30～49頭飼養農家が2002年には激減し，50～99頭飼養農家が6割を占めるに至っている。さらには，100頭以上飼育階層が3割に増えており，中でも150頭以上で搾乳している農家が9戸もみられる。頭数全体に占める各階層農家の割合をみると（図2），3割の100頭以上飼養農家でほぼ半分の乳牛頭数を飼養していることがわかる。

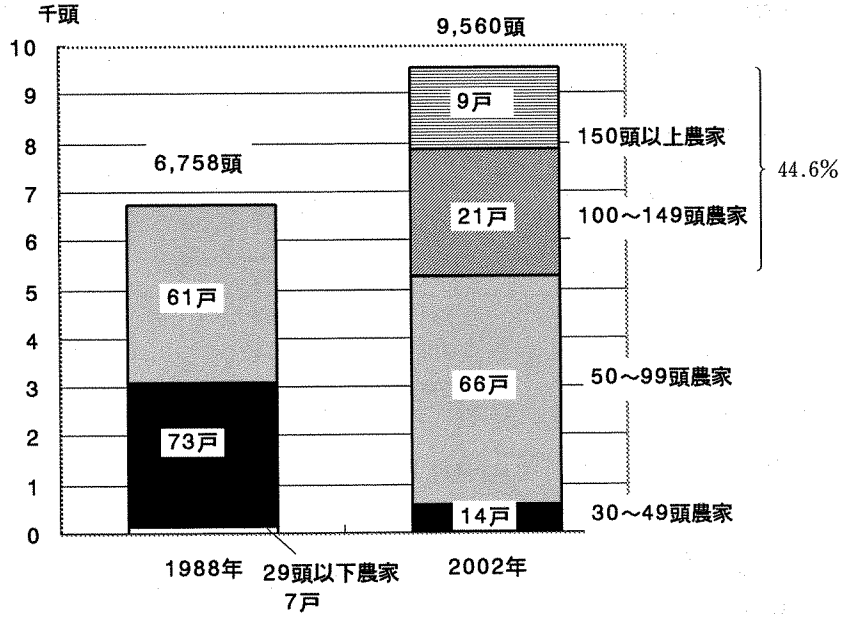


図2　A農協における経産牛頭数の状況

（図３）次に，生産乳量別に農家戸数割合をみると，1988年には圧倒的に多かった生乳生産量200～399ｔの農家が１/３に減り，400ｔ以上農家が増加していることがわかる。なかでも，700ｔ以上農家が25%を占め，いわゆる生乳生産量1,000ｔ以上のメガファームも14戸存在する。これら生乳生産量700ｔ農家が，Ａ農協における生乳生産量全体に占める割合をみると（図４）46.5%と半分に達する。生産乳量の倍増という急激な増産を，700ｔ以上生乳生産農家創出によって，達成してきたと見ることができる。

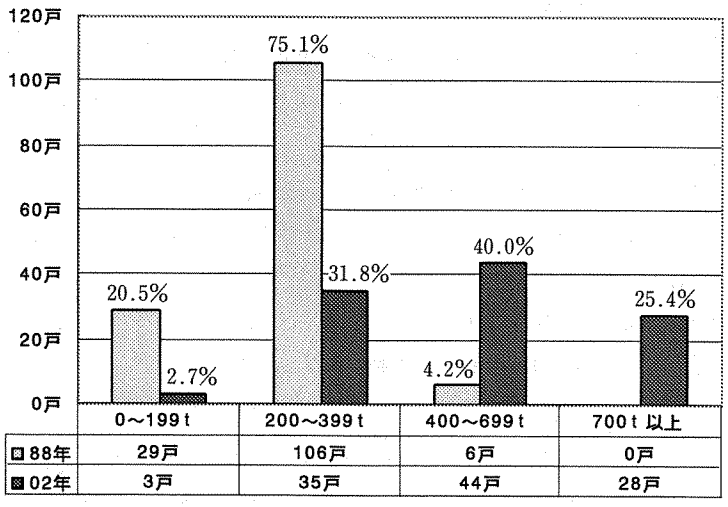


図３　Ａ農協における生産乳量別農家戸数の推移

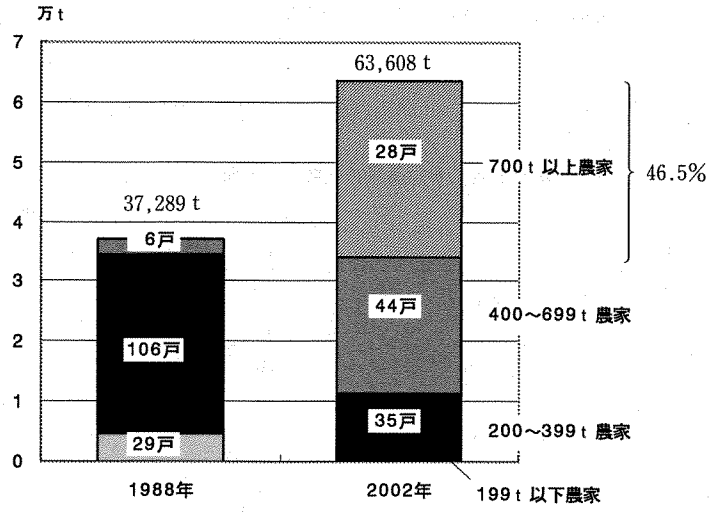


図４　Ａ農協における生産乳量の状況

A農協管内における地域酪農の動向は，総じて1988年当時の中規模階層農家（49頭以下飼養，200～300ｔ生乳生産）を規模拡大へと押し上げ，農家戸数の減少による生産乳量の全体的減少を，大規模階層農家（100頭以上飼養，700ｔ以上生乳生産）を創出することによって補い，増産を達成してきた過程であったといえる。

3．「マイペース酪農交流会」参加農家の特徴

(1)「マイペース酪農」の諸特徴

このような政策動向を実践的に批判し，農民家族経営を基本とした農民的酪農の発展方向を示してきたのが，酪農民による「マイペース酪農」の実践である。

「マイペース酪農」については，事務局の獣医師によって以下のようにまとめられている(6)。
一．農政その他にあまりふりまわされないで自分の考えで営農する
二．健全な経営をめざしての努力
三．生活重視。民主的な家庭生活
四．農業としての酪農―自然環境の中で生かされる農業

「マイペース酪農」の実践は，農民の希望や利益に沿わない政策に批判的に対峙し，人間らしい家族生活を実現しうる農家経営を追求しながら，土・草・牛の物質循環に生かされる農業を自主的・主体的に創造する内容を持つものである。

(2)「マイペース酪農交流会」参加農家の経営概要

以上の内容をもつ「マイペース酪農」の実践は，その結果としてどのような酪農経営を築いているのか。その概要を示すことで，酪農の地域的動向における位置を確認しておく。

表4　「マイペース酪農交流会」参加農家の概要（1990年）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	平均
草地面積（ha）	54	41	42	64	47	74	43	52
乳牛飼養頭数（頭）	87	63	106	115	91	170	103	105
うち経産牛頭数	43	41	48	57	48	80	54	53
一頭あたり牧草地（ha）	0.62	0.65	0.40	0.56	0.52	0.44	0.42	0.51
出荷乳量（t）	401	366	350	410	337	634	344	406
一頭あたり乳量（kg）	9,326	8,927	7,292	7,193	7,021	7,925	6,370	7,722
農業所得額（万円）	1,887	1,658	1,349	1,661	1,043	2,561	1,052	1,602
農業所得率（%）	47.9	48.6	35.6	40.3	31.1	36.3	30.5	38.6

注：「別海酪農の未来を考える学習会」実行委員会『私の酪農　いま，未来を語ろう』2003年より作成

表5　「マイペース酪農交流会」参加農家の概要（2002年）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	平均
草地面積（ha）	54	51	59	53	47	73	55	56
乳牛飼養頭数（頭）	75	74	76	59	61	144	70	80
うち経産牛頭数	43	43	50	41	40	82	45	49
一頭あたり牧草地（ha）	0.72	0.69	0.78	0.90	0.77	0.51	0.79	0.74
出荷乳量（t）	289	320	319	250	280	590	310	337
一頭あたり乳量（kg）	6,721	7,442	6,380	6,098	7,000	7,195	6,889	6,818
農業所得額（万円）	1,509	1,509	1,339	1,187	936	1,084	1,115	1,240
農業所得率（%）	52.7	48.3	43.7	50.5	35.6	20.3	41.2	41.8

注：「別海酪農の未来を考える学習会」実行委員会『私の酪農　いま・未来を語ろう』2003年より作成

（表4）1990年当時の経産牛飼養頭数は50頭前後であり，先述のA農協と比較して，もっとも層の厚い中規模層に位置していたことがわかる。しかし，経産牛一頭あたりの乳量をみると，①，②の農家は約9,000tに達しており，所属農協の中でも5位以内に入るなど，高い生産性を達成していた農家だったことがわかる。

90年代酪農政策の規模拡大，生産増大の圧力に抗し，「マイペース酪農」実践農家はどのような酪農経営を築いてきたのか確認する。2002年度の農家経営をみると（表5），先述のA農協では一戸あたりの経産牛頭数が8割も増加しているのであるが，「マイペース酪農」実践農家では，一戸あたり経産牛50頭前後の現状維持もしくは頭数が減少している。それに伴い，一頭あたりの牧草地面積が2割増加することになり，自家生産の牧草への依存度が高まっていると言える。生産乳量もすべての農家で減少しており，その結果，一頭あたりの生産乳量ものきなみ減少している。乳量の減少は，絶対額としての所得を減少させてはいるものの，所得率としては高い水準を達成している。

総じて，規模拡大を追求せず経産牛50頭前後を維持し，自家生産の牧草を中心とする土・草・牛の循環を基礎とする酪農によって，結果的に高い所得率をあげている酪農経営であるといえる。この過程を，事務局の獣医師は「穀物多給・乳量増の路線」から「自家生産の草への依存度を高め，健康な牛の乳量でよしとする路線」への移行と総括している(7)。

4．酪農民の学習運動の展開過程

以上のような特徴をもつ「マイペース酪農」は，酪農民主体のねばり強い学習運動に支えられて展開したことを忘れてはならない。ここでは，酪農民が自らの営農のあり方と意識を変化させていく過程について，学習内容の変化とともに考察する。

(1) 1980年代後半

別海町における酪農民の学習運動は，1970年代の労農学習運動に始まり，1970年代後半の「酪農経営技術研究会」を経て，1980年代後半からの「別海酪農の未来を考える学習会」（以下，「未来集会」を省略）へと展開してきた。86年の「未来集会」は，「国際化時代だといって踊らされる」ことなく，「学び合う仲間を増やして互いに守り合う力をつけ」[8]るため，全町規模で組織されたものだった。学習内容としては，講師を招いて酪農情勢・政策と別海酪農の動向を学び，根釧の地に根ざした農業のあり方，それを支える経営・技術について考えるようとするものであった。

しかし当時の酪農経営の実態は，「経営にも強く，技術にも力がついたときに，農民の主体性がより発揮されるものとして」[9]酪農技術に傾倒するあまり，頭数規模は一定でも個体乳量を増大させるというように，無意識のうちに規模拡大路線にのるものであった。それを後押ししたのは，農協や農業改良普及センターなどからの情報，周囲の農家の営農意識と動向からの影響である。酪農経営は自立性が高いとはいえ，その地域の酪農動向に影響を受ける。知らずに示される乳量増大，農業収入拡大の選択肢に対し迷いながらも，一定の生産量と収入額を達成するため，牛の生産能力をギリギリに追求する酪農となっていた。その帰結として，微妙な管理を強いられる牛の健康状態に規定され，「牛に縛られる」緊張した酪農労働になっていたことがわかる。

［農家②の1990年当時の経営状況］

○経営方針

・「科学的な酪農」をすることが，経営を向上させることだと思っていた。アメリカの酪農が飼養管理や乳牛改良で最も進んでいるとの認識で，いろいろな雑誌や講習会に出かけたもの。牛に問題が起きれば，技術が未熟なんだとおもい頭を抱え，バイパス油脂やビタミン剤などで，なんとかやりくりしていた。

・配合飼料にこんなに頼っていていいのかな，と思いながら，生きていくためには，生活していくためには，どこかを犠牲にしなきゃなんないと思う部分があった。そういう買い方じゃダメだよと言う人もいたけど，今こうやってやる方が一番もうかる，こうやってやっていかないと生活はしていけないんだ，というのがあったから，配合をやって一生懸命乳を搾ってとやっていた。

・世の中みんな増産。例えば「6,000 kgの牛だったらだったら50頭飼わないと食っていけないけれども，8,000 kgの牛であれば30頭ですむよ」という文章が，乳検だよりで流されていた。俺もまともにそれを信じてしまって，やっぱり絞らないとダメなのかなという思いもあって。だから，経費の方に目はいかないで，収入だけに目がいっちゃっていた。絞れば何とかなるという考え方だった。

○牛の状態

・当時は，それこそ一から十までやらないと気が済まなかった。酪農ヘルパーさんに頼めなかった。これ以上やったら死ぬかもしれないよというようなギリギリの扱い方をしてた，極端な言い方をしたら。マラソンでいえば全力で走らせるような飼い方。ちょっと変わっただけでもいつ乳房炎になるかなとか，ちょっと配合多くやりすぎたら食あたりになるという心配があった。搾乳時間なんて，30分なんて絶対狂わせなかった。それくらい，緊張しながら牛飼いをやってる時期があった。本当に，心の余裕なくやってた。

このように，学習運動を通じ，「農政が誘導する酪農像に対して，自分の納得したやり方の酪農像として『マイペース酪農』」が追求されてはきたが，「『マイペース酪農』とは呼んでも，それはまだ抽象的なイメージであって，具体的に酪農技術，農場の在りようについては」[10]依然として模索が続いていた。

(2) 1990年代前半

①学習運動の転機

学習運動は，91年第六回集会において，中標津町の酪農民・三友氏[11]を報告者として招くことで，大きな転機を迎える。同じ酪農民である三友氏の農業哲学とも呼ぶべき農業観と経営内容に学ぶことで，各々の酪農民は，自己の農業の在り方と意識を問い直すことになった。

［農家②の三友さんの聞いての反応］

・三友さんの話を聞いて，周りがショックを受けているのを見てショックを受けて，やっぱりな，こういうやり方もあるんだよな，というのがわかったんだよね。他の農家の生の数字を見て。だいたい同じ頭数ぐらいで，餌代が少なかった。それで，乳量は俺くらい絞ってて…という経営をやっていたから，何なんだろうなと思って。実際の間違いない金額は，ふつうの農家の会話ではかなか言ってくれない，言ったとしても嘘の場合もある。(学習会や交流会で) いろいろ表を作ったりしているなかで，「何でお前こんなに使ってるのよ」「使ってないのよ」という話を同じ仲間でできたのが，「やっぱり俺はこれやりすぎだよな」と思えるきっかけにはなったと思う。

このような自己総括を伴う学びを可能にしたのは，規模拡大政策に批判的でありながらも，知らずに規模拡大に巻き込まれている自己の酪農経営に，少なからず疑問や悩みを抱いていたからである。また，三友氏の酪農経営の具体的な数字まで丁寧に学び，自己の営農実践の結果と比較することで，より自己の酪農経営の矛盾が明らかに示されたのであった。具体的な営農実績をもとに学ぶ

こと，各自の実績を持ち寄り検証する学習方法は，それまでの学習運動で蓄積されてきたものである。この蓄積が，各々にとっての「ショックを受ける」学びを可能としたのである。

②「マイペース酪農交流会」を通じての学習

この学習会に参加した酪農民たちは「知識を得ただけに終わらせず，自ら考え，自らの実践に応用」[(12)]していった。この「実践的な学び」を支えるため，91年6月より「マイペース酪農交流会」（以下，「交流会」と省略）が毎月開催された。

「マイペース酪農交流会」は，出席者全員が酪農実践の状況や体験を出し合い，また，他の経験をじっくり聞くという方法ですすめられた。とくに91年から94年までは，毎月の作業を出し合いながら，各自の経営転換の結果を報告しあい，集団的に検証し合うことが中心になった。放牧について，堆肥と土・牧草づくりの関連について，育成牛管理や育て方などの具体的な技術問題に加え，年度末には経営実績を持ち寄り，一年の営農内容を確かめ合った。大切にされたのは，三友氏の営農モデルを目標とした具体化ではなく，「私らしい酪農・農場」を各々がつくりあげるという点である。誰かに従うのではなく，自分で考え判断し作り上げてこそ，根釧地域の自然条件に生かされ，家族生活が大切にされる「マイペース酪農」を実現できる。そのためにも，共同経営者である夫と妻がともに参加し，生活者の視点で体験を語り合い学ぶことが大切にされた。したがって，交流会の内容も当初から酪農経営・技術についてだけでなく，野菜づくりや教育問題など，農家生活についての話題が多くをしめ，暮らしの全体を見直し，農家本来の豊かな生活と生き方を考え合う場となったのである。

また「交流会」の開催によって，年1回の「未来集会」の内容も大きく変わった。93年から95年の「未来集会」は，それまでの講師を招き知識を学ぶ方法から，酪農民が実例を夫婦で報告し，討論交流し合うものとなった。いわば，一年間の「交流会」で重ねられた学びと営農実践を報告し，分析・検証する学習の場として位置づけられた。

［農家②　マイペース酪農交流会に参加する意味］

・基本的には，自分が主体の牛飼いだと思う。だから，先生が言ったことを実践するんじゃなくて，今実践していることの中から，何を学びとるかというのは自分の仕事。だから，草はどの時期に刈れば一番良いかとか，牛が何を訴えているかを感じとれる牛飼いにどうしたらなれるかということを，自分自身がどう高まっていくかということを主体にしているんじゃないかと思う。

・技術の体系があって，それに牛をあわせろというやり方じゃなくて，牛がいてそれにどう人間が答えてやるか，牛の要求に対して。牛や自然に対してどう関わっていけばいいかということを勉強していくのは，一生のことかなと思っている。

・同じような考え方でやっている人がいるから，仲間がいるということは安心できるということもある。昔は本当にお互いに勉強していく場だよ，という意味あいが多かった。最近は，勉強より，もうだいたいこの方向しかないというのが共通になってきて。

(2) 1990 年代後半

1995 年以降は，WTO 体制のもと国際競争力をもった生産体制を築くため，さらなる規模拡大と経営合理化が農業諸機関を通じて推進された。1994 年に別海町が実施したアンケート調査でも，59%の農家が「現状維持」を望んでいることが明かであったが，「不安だから規模拡大する，拡大すると投資回収のためさらなる拡大を迫られる」事態が，周囲の農家で見られるようになる。

「交流会」では，酪農情勢や周囲農家の状況も語られる。95 年からは，牧場での現地交流会による体験学習も取り入れながら，酪農家の規模拡大が何を招くのか，大規模化が一層すすむ地域の中で，「農業としての酪農」が以下にあるべきか，確認されていく。さらに，チーズづくり講習会や「オランダの酪農村の生活を堪能する会」の視察など，農家の食生活を改善し，農村文化を創り上げる実践へと広がりを見せていった。

しかし 96 年には，酪農生産基盤を大きくゆるがす地域問題が持ち上がる。米海兵隊の矢臼別演習場への移転問題と，流通合理化の一貫たる別海町内 4 農協合併問題である。96 年から 97 年にかけての「交流会」は，「私らしい酪農・農場」を安心して営むために地域や農協はどうあるべきかという地域課題を議論する場となり，他組織が主催する学習会と連携しつつ，問題の本質を検証する場となった。「交流会」を通し，各々の酪農民は，農協の財務欠陥を解消するという農協合併の真のねらいを明らかにし，一人ひとりが主体的に判断しつつ発言していくことの意味を考えながら，農協の議論に参加した。結果的に，米海兵隊の演習受け入れは強行されたものの，農協合併については，農協合併を否決する世論をつくりあげた。「酪農生産も農協もやっていける」という「マイペース酪農」の実践に裏付けられた発言が，農協合併を否決する主張を支えたのであった。

さらに，土地の浄化能力の限界を超えた頭数規模拡大は，ふん尿処理問題を深刻化させ，河川の水質環境汚染や「悪臭公害」と呼ばれる地域問題を引き起こしていく(13)。98 年以降の「交流会」でも，ふん尿処理・利用の問題が多く話し合われるようになった(14)。法律による施設整備が義務づけられることから，より維持管理がしやすい，効率のよい方式を求めて，堆肥化施設や他地域の農場の見学会を開催し，情報を収集しつつ検討を重ね，各農場での施設装備の工夫と検証が行われている。

5．まとめにかえて

酪農民の学習実践と営農実践は，相互に関連しながら，以下のように展開してきた。

1980年代後半には，酪農をめぐる情勢と政策を批判的に学習する「未来集会」が開始された。しかしそれは政策批判学習に留まっており，個々の酪農経営は，生産乳量と収入を追求し採算の合う酪農経営を追求すればするほど「牛に縛られ」酪農業も生活も貧しくなるという，規模拡大路線への追随に陥っていたのであった。

三友氏との出会いを機に，酪農民はそれまでの自己の酪農のあり方と意識を問い直すことになる。91年から始まった「交流会」では，酪農民は自己の農業体験を「語る」ことで実践から学びつつ，集団的検証という協同的過程をへて，農業観と農民的酪農経営技術を築きあげてきた。それは自然循環と家族生活を大切にする「私の酪農・牧場」を，労働主体，経営主体として実践しながら築きあげる過程であった。さらに，90年代後半以降の「交流会」での学習実践は，個々の農家の酪農経営の発展を基礎としつつ，それを補完する地域的・集団的生産課題にとりくむ，酪農民の主体的力量形成を促してきたと言えよう。

「マイペース酪農交流会」の学習実践の特徴は，「語る」ことを通して学ぶ点にあった。

「語る」ことによる学びの意味は，交流会発足当初から，次のように理解されている。

> 「91年を振り返ってみると，5月の学習会以来，いろんなことを学びました。何か新しいものを知ったというのではありません。どこから，なにを学んだかと言えば，それぞれ自分の実践を通して学んだのです。自分の毎日の仕事に対して研究心が深ければ深いほど，学ぶことも多かったはずです。学ぶとは自分から学ぶことなのですね。」(15)

「語る」こと自体が，個々の営農実践を対象化し自覚する過程であり，さらにこの対象化は，同じ酪農経営を模索する他農家の実践を聞き，違いや共通点を発見することで補完される。このような「交流会」での協同的学びは，日々の営農実践に反映され，その結果がまた「交流会」で語られることで実践的な学びとなる。この実践と対象化・自覚化の関連の中で，酪農民たちは「農業としての酪農」への理解を深め，「私らしい酪農」を支える主体性を獲得していくのである。「語る」ことによる学びは，酪農政策やあふれる情報，酪農情勢の変化に主体的に対応し，自己を主体とした酪農を支える要となっているのである。

注

(1)　別海町における酪農民の学習運動については，数多くの著作，論文がある。代表的なものとしては，木

村純「地域酪農の発展と酪農民の主体形成－根釧地域別海酪農を事例に（上・下）（『名寄女子短期大学紀要』第18，19巻，1985年，1986年），木村純「農業経営の展開と農民の学習課題」（美土路達雄監修『現代農民教育論』あゆみ出版，1987年），山田定市編『地域づくりと障害学習の計画化』北海道大学図書刊行会，1997年2月。

(2) 1994年に北海道が発表した「北海道農業・農村のめざす姿」にも，経産牛40頭，出荷乳量320tの営農類型としてとりあげられている。また，1994年の「別海町農業振興計画」策定にあたっても，「マイペース酪農交流会」のメンバーと別海町経済部酪農対策室との懇談がもたれ，当時の別海町内の平均飼養頭数を下回る40頭規模「今後の主要な経営形態」として示された。

(3) 生源寺眞一「新たな酪農乳業政策をめぐって」(『食料政策研究2000年－II』食料・農業政策研究センター，2000年）を参照。

(4) 原料乳価の価格保証を行う「不足払い制度」も，2001年に改正され，新制度に移行した。

(5) ここに掲載したデータは，A農協の平成元年度と平成15年度の「営農計画集計表」を参照した。

(6) 高橋昭夫「人間らしい環境と農業を求めて」『月刊社会教育』No. 515，1998年10月号，pp. 21－22

(7) 高橋昭夫「マイペース酪農を実践を経て，21世紀別海酪農の方向を考える」『北海道政治経済ハンドブック2001』北海道経済研究所，2001年2月，pp. 81

(8) 高橋昭夫「牛飼いで生き抜くための学び合い」『月刊社会教育』No. 407，1990年6月号，pp. 35

(9) 高橋昭夫「別海酪農の未来を考える学習会－マイペース酪農交流会－」『農家の友』農業改良普及協会，1994年6月号，pp. 25

(10) 高橋昭夫「人間らしい環境と農業を求めて」『月刊社会教育』No. 515，1998年10月号，pp. 19

(11) 酪農家・三友氏の営農哲学は，三友盛行『マイペース酪農－風土に生かされた適正規模の実現－』（農山村文化協会，2000年）に体系的にまとめられている。

(12) 高橋昭夫「別海酪農の未来を考える学習会－マイペース酪農交流会－」『農家の友』農業改良普及協会，1994年6月号，pp. 25

(13) 99年には，いわゆる畜産環境三法（「家畜排泄物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」「持続性の高い生産方式の導入の促進に関する法律」「肥料取締法の改正）が制定・施工され，億単位のモデル事業，各種補助金制度による整備が推進されている。

(14) 本来，土・草・牛の自然循環に生かされる農業を基礎としてきた「マイペース酪農」の実践では，ふん尿は完熟堆肥にして草地に還元し積極的利用をはかっているため，「悪臭問題」が発生することは少ない。

(15) 『マイペース交流会の案内』1992年1月より

［資料１］　農家①の経営転換と意識変化

◆経営転換前の経営方針と仕事意識

○経営方針

［夫］乳検や乳牛の登録を開始し，頭数はあまり増やさずに，一頭あたりの乳量を高めることを経営の中心に据えていた。飼料作物の中にデントコーンを取り入れることにより草地更新を短縮化させたり，輪換放牧などの集約的な放牧の実施，飼料計算による配合飼料の増給などにより，生産は右肩上がりで増加して経営も安定していた。40歳を目前にして，自分の経営にそれなりの自信がもて，新たな投資をともなう更なる経営展開を考え，フリーストールのセミナーなどに積極的に参加していた。

［妻］同じ農協の中でもどんどん頭数を増やして，施設を建てて牧場を大きくしていく人と，あとは，頭数を増やさなくても乳量を増やそうとしている人がいて，どちらかを選ぶしか農業のやり方ってないのかな，と思っていた。ある程度安定した収入も欲しいし。

［夫］意識としては，特別そんなに絞ろうとは思っていなかったが，結果として結構出てしまって（当時，所属農協でも１位２位）。今度，それを意識すると，そのレベルを持続しなければいけないと思う。今度はその数字に自分たちがとらわれてしまう。結局，牛に縛られるというか。

○牛の状態，酪農労働の状態

［夫］［妻］当時すでに酪農ヘルパー利用組合ができていたが，ヘルパーを頼む気はさらさらなかった。牛が心配で人に任せられなかった。自由時間が比較的にあったのもあるが。（何故か？）ギリギリまで牛の能力を高めるということは，それなりに牛も微妙な状態。10,000 kg乳を出す牛というのは，本当にスレスレのことろ，いつ転ぶかわからない，いつ落ちるかわからない，綱渡り状態。乳を搾る人が変わればどうかなるという心配で，人に任せるには不安が伴った。

◆経営転換後の変化

○経営転換の契機

［夫］三友さんの話を聞いたこと。一番印象に残っているのは，一つは「400ｔも絞らないと食べていけないのかい。ぼくは200ｔでも食べていける」ということ。もう一つは，自分では頭数を増やさず一頭あたりの生産を伸し全体の生産量を上げることを，規模拡大だと考えていなかった。ところが，「自分の土地が増えていない中で一頭あたりの生産を無理矢理あげるには，外国の穀物を多給することになる。つまり外国の土地を利用している，それも規模拡大だよ」と言われた。自分では規模拡大していないつもりだったから，外国の土地を使って規模拡大していたんだと思った。

○精神面での変化

［夫］仕事そのものが楽しいという感覚が以前はなかった。例えば今だと，堆肥の切り返しをしてもそのこと自体が楽しくできるというか，そういう変化が一番大きい。三友さんの話を聞いてから，本当に農業が面白くなってきた。それまでは，そんなに深く考えることがなかった。

［妻］私が思うのは，自然や今の環境の中で，自分も無理をしないで自然の中の一員として生活していける。人間だけが上だとか先だとかじゃなくて，そういう気持ちで過ごせるような気分になれてるのがいいなと思う。牛に無理をかけてないという気持ちがあるから，乳がそれなりに出るだけでいいというか，食べていけるだけ乳を出してくれればいいやという気持ちになっているから，苦痛でない牛飼いになっているかなと思う。

◆マイペース酪農交流会に参加して

○夫婦で参加するということ

［夫］三友さんは奥さんと二人できて，奥さんもきちんと話してくれて，それがすごく新鮮だった。うちも一緒には出ていたんだけど。それがすごく新鮮で，それからうちらもずっと二人で。二人でいって，営農のこととか話をするのは，男にとってはすごく都合の悪いこと。女の人の方が正直だからさ。男がやせ我慢で格好の良いことしゃべっても，後から調べると簡単にひっくりかえされたりして。

○「語る」ことを通して学ぶことの固有性

［夫］これから牧場始めたい人が，実習していて「こういうことがあったんだけど，どうですか」と聞かれて，誰かが体験談を話してくれる。自分も「そうなのか」と再認識したりだとか，いろんな情報交換の場で。自分が後を継ぐときに，そういう意識が全然なかったものだから，自分でやりたいと思ってくる若い人を見ると，反面うらやましいという気持ちがあって。そういう人と話をする，話を聞くのが楽しい。自分の失敗もあるしね，そういうのは励ましてもらってさ（笑）。

［妻］話をすることで自分自身でそれを再確認する，人の話を聞くことで学習する，困ったことを話すことで周りの人が答えてくれたり，助言してくれてとか。落ち込んでいても元気をもらえるとか。

酪農に対する考え方

○自分が考える「農業としての酪農」

［夫］交流の中から，良い堆肥を作り良い土を作るゆとり，良い土からとれた草を腹いっぱい食べさせるゆとり，個々の牛たちからの語りかけを受けとめるゆとり，そしてそこから生まれる生産量でよしとする。そのことを営農の基本と考えるように。

自分が考えるのは，一から十まで自分で。草も自分でとって，子牛も自分で育てて，一人前だと思う。自分の生き方と結びつけた農業をしようとすると，一から十までやりたくなる。そうでなくて，生活の手段というか，ある程度割り切った考え方になると，分業というか，システムというか，そういう方向になるんじゃないかと思う。

［妻］自然環境に考慮しながらの農業であるべきではないかと思う。そこが抜けた自分のやりたいことだけ，それで儲かればいい，例えばふん尿が川に流れてもいい，というのは違う。ラップフィルムなんかも使わないでやれれば一番いいなと思いながら。

○規模拡大路線に対して

［夫］ああいう営農は工業的な発想。だから，農業がだんだんいびつな形になっていると思うし，かえって農業自体が弱くなっていると思う。一見，規模が大きいと強いみたいだけどさ。かえって地に足のついた農業の方が，本当の意味で強いんじゃないかなと思う。だって，今規模拡大の方向は，すべて補助金，かっこよく支援システムと言ってるけど，いろんな面でお助けしないと拡大できない方向。本当に弱いもんだと思う。しょせん，そういうことで地域は豊かにならないんだから。個々の農家がしっかり自立できるような方向でいかないと。

［資料2　農家②の経営転換と仕事意識］

◆経営転換前の経営方針と仕事意識

○経営方針

・「科学的な酪農」をすることが，経営を向上させることだと思っていた。アメリカの酪農が飼養管理や乳牛改良で最も進んでいるとの認識で，いろいろな雑誌や講習会に出かけたもの。牛に問題が起きれば，技術が未熟なんだとおもい頭を抱え，バイパス油脂やビタミン剤などで，なんとかやりくりしていた。

・配合飼料にこんなに頼っていていいのかな，と思いながら，生きていくためには，生活していくためには，どこかを犠牲にしなきゃなんないと思う部分があった。そういう買い方じゃダメだよと言う人もいたけど，今こうやってやる方が一番もうかる，こうやってやっていかないと生活はしていけないんだ，というのがあったから，配合をやって一生懸命乳を搾ってとやっていた。

・世の中みんな増産というか，例えば「6,000 kg の牛だったらだったら 50 頭飼わないと食っていけないけれども，8,000 kg の牛であれば 30 頭ですむよ」という文章が，乳検だよりで流されていた。俺もまともにそれを信じてしまって，やっぱり絞らないとダメなのかなという思いもあって。だから，経費の方に目はいかないで，収入だけに目がいっちゃっていた。絞れば何とかなるという考え方だった。

○牛の状態

・当時は，それこそ一から十までやらないと気が済まなかった。でも，酪農ヘルパーさんに頼めなかった。牛をギリギリのところで，これ以上やったら死ぬかもしれないよというようなギリギリの扱い方をしてた，極端な言い方をしたら。マラソンでいえば全力で走らせるような飼い方。ちょっと変わっただけでもいつ乳房炎になるかなとか，ちょっと配合多くやりすぎたら食あたりになるという心配があった。搾乳時間なんて，30 分なんて絶対狂わせなかった。それくらい，緊張しながら牛飼いをやってる時期があった。本当に，心の余裕なくやってた。

経営転換後の変化

○経営転換の契機

・三友さんの話を聞いて，周りがショックを受けているのを見てショックを受けて，やっぱりな，こういうやり方もあるんだよな，というのがわかったんだよね。他の農家の生の数字を見て。だいたい同じ頭数ぐらいで，餌代が少なかった。それで，乳量は俺くらい絞ってて…という経営をやっていたから，何なんだろうなと思って。実際の間違いない金額は，ふつうの農家の会話ではかなか言ってくれない，言ったとしても嘘の場合もある。（学習会や交流会で）いろいろ表を作ったりしているなかで，「何でお前こんなに使ってるのよ」「使ってないのよ」という話を同じ仲間でできたのが，「やっぱり俺はこれやりすぎだよな」と思えるきっかけにはなったと思う。

○経営転換後の変化

・仕事の面では，特に楽になったとか何とかははない。配合は減らしたけれども，その分草が食えているから，労働的には特に。

・精神的にすごく楽になった。まず，乳房炎や腰抜けが減った。乳房炎になっても抗生物質の効き方が全然違う。牛も人間もそうだと思うけれども，病気は薬で治すんじゃなくて，動物の体の抵抗力とプラスになって初めて治るんじゃないかな。乳房炎もどんなに抗生物質が良くても，抵抗力を付けてや

らなければ治らないということがわかった。今から考えたらやっぱり変わった，牛の状態が。

・今はもうすごく，ジョギング程度の買い方で，余裕はあると思うんだ，牛に。人の手が少しぐらい変わったって，乳房炎にもならない。牛の心の余裕，牛の方が余裕を持ってくれる。こっちにも心の余裕が出来たし，牛の方にも余裕が出来てきているというか。全体的な飼い方が変わったということ。

マイペース酪農交流会に参加して

○「語る」ことを通して学ぶことの固有性

・基本的には，自分が主体の牛飼いだと思う。だから，先生が言ったことを実践するんじゃなくて，今実践していることの中から，何を学びとるかというのは自分の仕事。だから，草はどの時期に刈れば一番良いかとか，牛が何を訴えているかを感じとれる牛飼いにどうしたらなれるかということを，自分自身がどう高まっていくかということを主体にしているんじゃないかと思う。

・技術の体系があって，それに牛をあわせろというやり方じゃなくて，牛がいてそれにどう人間が答えてやるか，牛の要求に対して。牛や自然に対してどう関わっていけばいいかということを勉強していくのは，一生のことかなと思っている。

・同じような考え方でやっている人がいるから，仲間がいるということは安心できるということもある。昔は本当にお互いに勉強していく場だよ，という意味あいが多かった。最近は，勉強より，もうだいたいこの方向しかないというのが共通になってきて。

酪農に対する考え方

○自分が考える「農業としての酪農」

・自分も趣味らしい趣味のないけれど，あえて言えば，自然の中で暮らしていくというのが趣味なのかなと思ったりもする。

・牛飼いの基本は，健康的な牛をどうやって飼っていくかということと，ここにはここに合った牛飼いをどうやってやっていくかかなと思っている。ここに合った牛飼いというのは，ここの草を基本とした牛飼いをどうしていくか，ということだと思う。

○規模拡大路線に対して

・1頭の牛からたくさん絞ることがいいと考えている人と，一定の面積からたくさん草が取れればいいと思っている人がほとんどなんだけれども，実際は違う。自然環境の中で考えれば，それに適した量が一番良い草。それが1 ha 1頭でつり合ってるんじゃないかと思う。堆肥を入れて，肥料をたくさん入れれば，2頭は飼えるんだけども，それは良い草かといえば，俺からいわせれば良い草ではない。だけども，世間一般では狭い面積で牛をたくさん飼うのが良いと思っている人が，まだ多い。

・それぞれの酪農と言える酪農をやっている人は，何人もいないと思うんだけど。いろいろ影響されてるんだ。心ならずもという部分もあるし。屋根着きの堆肥舎にしてもそう。あればいいなと思うんだけど，ああいうやり方じゃはたしてなあと，国から押しつけられてるんだよなと。

・畜産というのは，人間の食えない草を食わして，人間の食糧にするという作業。小麦やトウモロコシをどんどんやってという牛飼いは未来永劫続いていくような牛飼いじゃない。やっぱり，将来的には人間の食えない草とか，トウモロコシにしてもカスのトウモロコシであったり，ふすまであったりして，そういうようなものを利用していくのが，本当の畜産，牛飼いの方向だと思っている。いずれはそういう世の中が来るか，人間の世界がダメになるか，どっちか。